

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだいい



ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

第 2 7 号

(2 0 0 4 年 8 月 1 7 日)

発行所：〒565-0871 吹田市山田丘 1 - 2

大阪大学人間科学部 渥美公秀研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

電話 & Fax: 0 6 - 6 8 7 9 - 8 0 6 6

5 1 回大会報告号

発行人：渥美公秀

編集担当：廣岡秀一

第 5 1 回大会が南山大学で開催されました

第 5 1 回大会は、津村俊充大会委員長（中村和彦事務局長）のもと、本年 5 月 8 日～ 9 日に、名古屋の南山大学にて開催されました。南山大学のご事情で 5 月開催となりましたが、昨年度の大会同様に、盛会のうちに無事閉会されました。大会委員長からご挨拶をいただきましたので、ここに紹介させていただきます。

日本グループ・ダイナミクス学会第 5 1 回大会を終えて

第 51 回大会準備委員会 委員長
津 村 俊 充

第 5 1 回大会も、多くの会員のご参加により、盛会に終えることができました。今回の大会は、第 5 0 回記念大会後であり、日本グループ・ダイナミクス学会の次の半世紀に向かう新しい一歩となることを願って、大会準備・企画・運営を行いました。大会のモットーに"インタラクティブに！"を掲げ、従来のワークショップの概念を広げ、グループ・ダイナミクスに関わる実践やトレーニング方法の体験ができるプログラムも含めた「インタラクティブ・プログラム」を企画しました。おかげさまで、研究法から応用実践まで幅広い「インタラクティブ・プログラム」が 1 2 セッション繰り広げられました。

また、講演会には、南山大学色を出すべく、本学の宗教文化研究所のハイジック教授による「コミュニケーションの脱神秘化」というタイトルで、人間の言葉にならないもう一つの次元をめぐる講義をお願いいたしました。そのお話は、現代社会への問題提起として興味深く聴くことができました。その他、ロング、ショート、パネル等の研究発表の申し込みも多数有り、当日は、各会場におけるディスカッションも"インタラクティブに！"おこなれたことを大会企画運営担当者としてうれしく思っております。

大会参加者数は、第 5 0 回記念大会とほぼ同数の 3 0 0 名を超すことができました。特に、正会員の参加にとどまらず、当日会員として多くの方々がグループ・ダイナミクス学会の大会に顔を出して頂けたことも付け加えておきたいと思います。

今回は、大会参加者の皆様から発表の要旨をデジタル情報の形で頂戴し、第 5 1 回大会 WEB にて、プログラムと要旨集を掲載することも試みました。多くの方々のアクセスがあり、WEB を通しての参加へのお問い合わせがあり、こうした試みがプログラムの内容と相まって当日参加者の増加に影響したのではないかと推測しています。

最後になりましたが、このように大会が成功裡に終えることができましたのは、会員の皆様方のご参加はもちろんではありますが、準備段階から当日の大会運営まで細部にわたりサポートしてくれた、準備委員会の皆様方のご尽力によるものと理解しています。改めて、関係者の方々に深く感謝を申し上げます。

名誉会員の推戴と学会賞の授与

日本グループ・ダイナミックス学会諸規定（名誉会員の推戴条件）における「学会活動に著しい貢献のあった者」に該当する会員として、長期にわたり理事・常任理事の任に当たってくださった鈴木康平先生が名誉会員に推戴されました。

また優秀論文賞には、42巻1号に掲載された「高口央・坂田桐子・黒川正流 集団間状況における複数リーダー存在の効果に関する検討」が受賞されました。

先生方、おめでとうございます。

名誉会員の推戴を受けて

名誉会員の御推戴を拝受してのご挨拶

名誉会員 鈴木 康平

この度、はからずも、学会名誉会員の御推戴に与り、恐縮かつ忝なく存じます。

さて、わたくしこと、学会理事、学会機関誌「実験社会心理学」編集委員、大会委員長（第41回）などを務めさせていただいたことは、まさしく、わたくしが、たまたまその時期に出会えた賜物にほかならないと認識しております。これらの職務を曲がりなりにも遂行できたことは、周りの多くの会員のみなさまのお力添えゆえのことであると感謝の念で一杯です。

顧みますれば、先の大戦（第2次世界大戦）終結後の間もない頃、今は亡き牛島義友先生、三隅二不二先生を基軸として、集団のダイナミックスの理解・解明に対する熱意溢れるアプローチの第一歩が九州大学において踏み出されたことは、会員の皆様すでにご承知の通りです。具体的には「教育の場における集団のダイナミックス」「社会構成の基盤を

<ナカニシヤ出版広告挿入>

なしている現実の集団（職場など）のダイナミックス」についての研究が出発点であったと思います。わたくしが学会の草創期を経て基礎基盤の土台確立期に入り始めた比較的早期に会員として入会する機会を得たことはまことに幸運でした。その当時の学会機関誌の名称は「教育・社会心理学研究」でした。私事にわたって恐縮ですが、その頃、わたくしは、将来、教員となることを目指して学ぶ学生たちの教育にあたる学部に所属し、社会心理学・発達心理学の視点から「教育」にかかわる諸問題を考究すべく微力ながら努力を傾注しておりました。学校において教師は「個（教師）」と「個（児童・生徒）」のぶつかりあいの次元と、「個（教師）」と「集団（学級）」との絡みが織り成す輻輳する次元との接点に常に立っていることをひしひしと感じさせられる日々でした。この問題点が今もわたくしの中できわめて重要な位置を占め、常に「その対応やいかに？」と迫ってきています。

ここで、名誉会員御推戴を拝受したことについての御挨拶という本稿のテーマからはずれることになるかとも懸念いたしますが、自分なりに取り組み、未だに自分で十分納得できない事柄、あるいは、取り組みたいが現時点ではそれにアプローチする適切なデザイン・方法がわたくしの中で固まらないまま煮え切らないで尾を引いていることについて、この場を借りてお話ししたいと思います。諸賢からの厳しいご批判を願って筆を進めます。

まず、「一般規範を探索・構築するためのアプローチ(nomothetic approach)」と「個の法則追求のためのアプローチ(idiographic approach)」についてです。「学級集団の中で子どもたちの攻撃行動の解明」を例にとると、「小学6年生の児童たちの友人関係において、攻撃行動を発現させる動機は一般にかくかくしかじかであると推論できる」という「一般性の規範・法則」の発見と「今、目の前にいるこの小学6年生の児童は友人にバットで殴りかかり重傷を負わせた。この加害児童の攻撃行動を発現させた動機はかくかくしかじかであると推論できる」といった「その個人(のみ)に当てはまる法則」の発見の意義です。教師は両者とも必須の事柄です。しかし、個々の教師が実際子どもたちを目の前にして、教育活動を展開する以前に身につけているのは、前者のみです。これほどさように、理論と実践のはざまを埋めていくのは極めて大きなエネルギーを必要とします。それでも、苦闘の末に両者を獲得し、それらを統合して前進できる状況に到達した人は幸運です。「一般的にはこうだけれども、ここでは違うんだ」と苦悩している教師の姿に直面し

< 北大路書房広告挿入 >

たのは一度だけではありませんでした。わたくし自身、「学校におけるいじめ」の問題をここ十数年間にわたり考究してきたながら、「これぞ、いじめの根幹は！」というところに止らず、悶々としているのが偽らざる気持ちです。

そして、2つ目は「因果関係」と「相関関係」の問題です。このことについてはかなり多くの場で議論がなされていますので、詳論は避けますが、帰属理論が起爆剤となり、猛烈と言う言葉で言っても過言でないほどに、世界の社会心理学者たちの関心を集め、実に膨大な数の研究・論文が出されたことは記憶に新しいところであると言えます。それだけ多くの研究者が気にしていたことなのだと推測できます。

さらに、3つ目として、「研究主体」と「研究客体」が「同じ」であるという「心理学」の特質にかかわる事柄です。わたくしは「理論」が先にあって「人間」がそのあとでくるという思い違いの研究は是非避けたい気持ちを持ち続けています。すなわち「あの集団は。理論から逸脱している。おかしい集団もあるものだ」という類の所見・見解に遭遇すると「自分自身を振り返ってみなさい」と言いたくなります。この点、ハイダーの「ナイーヴ・サイコロジスト」「日常生活の普段の行動の中には宝が埋もれている」という箴言を再吟味することを薦めます。

最後に、そしてわたくしにとって、かなり重要な問題なのですが、「研究の方法論」についての事柄です。わたくしは方法と方法論を分けて考えたいのです。「方法」はいわゆる研究資料の具体的な収集の仕方・スキルであり、「方法論」は、その研究で明らかにしたいことについて何故その方法を用いて資料を採ることが適切なのか、その根拠を示すことと考えます。「人間・その集団」のことを知るために、どうしてそのやり方が「適切な」のか、ほかに何かもっと「適切な方法」があるのではないかとといった事柄です。極めて重要かつ難しい問題です。

なお、以下の問題はわたくしの頭に常に宿りながら、それへのアプローチのパラダイム構築に苦慮している事柄です。

まず「価値（体系）」「価値観」の問題です。わたくしたちの世代は、先の大戦での我が国の敗北を、思春期入り口のところで迎えました。わたくしたちのわずか1～2年先に前に生まれた先輩たちは、その多くが戦場で散っていった世代に属しています。その方々の過酷な人生と較べるとわたくしたちの世代は「あのときは苦しかった」などとはとても言えないと思います。しかし、子どもなりに「価値体系」の大転換を経験し、そのトラウマがことあるごとに、そして今になってもこころを揺さぶります。きのうまで「これが大切だ。生命をかけても守るべき崇高なことだ」と教えられてきたことがひとつひとつ「完全に否定」されていくことの経験は残念ながら「貴重な」ものとなって身に染みついています。研究ひとつを取り上げても同じことが言えます。「本当の、価値ある」研究とは何か、後ずさりしないで考えていきたいと思っています。

今ひとつは「集団の意思決定と意思表示」の問題です。これはかなりの研究が行われており、今さら何をといった感想をもたれる方が多いと思います。しかし、わたくしにとりましては、どうも気になることです。それは、「集団の意思」とは何か、それは、集団の構成員の個々の意思の単なる集合ではないことは十分承知しているつもりです。それにもかかわらず、こころのどこかに引っかかっている問題です。

さて終わりに触れたいのは、人間研究の意義に関することです。わたくしは人間に関する諸研究が進めば進むほど、すばらしい人間生活が開けていくと期待するのにやぶさかではありません。しかし、現実はどうなのでしょう。たとえば、卑近な一例として、わたくしたちの身近にある養育・教育の場に目を向けてみると、どうでしょう？。そこにあるのは以前と較べ一向に変化が見られない、いな、幼児虐待、学級崩壊の発生など、以前と較べ、悪化さえしているのが実情であるというのは言い過ぎでしょうか。どこか何かが欠けていると痛感している昨今です。アリストテレスの「De Anima」以来2千有余年を経た今日でも、その当時から人のこころは停滞を続け、進化(?)を忘れているのでしょうか。

以上、名誉会員御推戴の拝受の所感の場をお借りして、わたくし自身が、研究の途上で気になっていることを思いつくままにしたためました。これらに対してご異論も多くあることと思います。遠慮なくご指摘ください。

これからもできうる限り、老骨にむち打って、皆さんのグループ・ダイナミックスの研究論文を拝読したり、学会の場での研究発表などをお聴きしたりして、改めて一步一步踏みしめていこうと思っています。どうかよろしく願いいたします。

「優秀論文賞」を受賞して

 広島大学 高口 央

今回、優秀論文賞を思いがけず頂戴し、非常に驚いております。実際、喜びよりも驚きという感情が受賞できたという事実に対する正直な感情です。賞を頂きました論文は、投稿後掲載まで一年余の審査期間を要しました。これは、一重に私自身の文章の稚拙さと研究計画、分析方針の曖昧さによるところだと思います。にもかかわらず、今回多くの論文の中から選定していただきましたのは、審査を直接に担当して下さった主査、副査の先生の非常に丁寧なご指導、また学会発表時における多くの先生に頂きましたご助言によることだと感じております。皆様に直接にお礼を申し上げたいところですが、それはできませんので、この場をお借りして、深くお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

本論文「集団間状況における複数リーダー存在の効果に関する検討」は、広瀬幸雄先生が作成された仮想世界ゲームを実験技法として用いた研究です。私が、共著者である坂田先生、黒川先生の指導を受け、初めてこのゲームを実施したのは卒業研究の際でした。それ以後、博士課程前期に入学し、博士課程後期に進学した三年間で大学生を対象としてゲームを繰り返し実施し、論文という形式を整えるに至るまで、得たデータの検討方法、また解釈の仕方は、学会等でのご助言・コメントを頂きながら修正・再考を重ねました。ですので、長期間にわたって（若輩が故に、私にとっては十分に長いのです）取り組んできた成果を、今回学会において認めていただけたことは、非常に大きな喜びです。

2003年度という年は、私にとって非常に重大な年となりました。この優秀論文賞を頂けた事に加えて、私事ながら博士課程を何とか修了することが出来たのも、2003年度でした。また、広島大学障害学生のためのボランティア活動室に非常勤の教務補佐ではありますが、就職もすることが出来、重大事件が重なった年となりました。今後、この賞をいただけたことを励みとして、研究者として成長できるようさらに努力を重ねていきたいと思っております。一発屋として消えていかぬよう、研究を続けて参りたいと考えます。本当にありがとうございました。

最後に、身内への言葉をこういった公共の場で述べるのは、適切なことではないかもしれませんが、本論文の執筆に際して責任ある立場から多くの指導・助言をいただいた、共著者である坂田桐子先生、黒川正流先生に改めて御礼を述べさせていただきたいと思っております。学部時代からのお二人によるご指導の結果が、今回の受賞という結果に結びついたものと思っております。深く、深く感謝いたします。

第51回大会印象記

日本グループ・ダイナミクス学会第51回大会に参加して

大阪国際大学 森上幸夫

第51回大会の参加報告を嘘偽り無く正直に述べることを誓います。

大会開催期間は5月8日と9日、ゴールデンウィーク直後の週末だった。私が大会会場の南山大学へ向けて神戸の自宅を出たのは、8日の午前11時だった。ずいぶん前から、初日の会場に午前10時前に到着し、発表会場の下見を兼ねてポスター発表を見た後、総会に出て弁当をいただくというスクリプトを持っていた。ところが、2つの連名発表の資料が不十分であることに気づいた私は、大会初日の朝3時間ほどパソコンに対峙するはめになった。結局、会場には午後2時頃に到着した。余談だが、会場最寄りの地下鉄駅から会場まで急なアップダウンの坂を歩きながら、大学院進学後の自分の来し方道を重ねあわせてしまった。

このような認知処理をしていた私には、今大会に関する2つのキーワードが頭から離れなかった。ひとつは“インタラクティブ”、もうひとつは“グループワーク”である。前者は、大会準備委員長の津村先生が第1号通信で述べられていた「インタラクティブに！」というメッセージに影響されたもので、後者はグループワークの一大拠点である南山大学

で開催されることによる期待感をともなうものであった。そのキーワードを象徴するように、IPという略称の“インタラクティブ・プログラム”が両日にわたり複数同時進行されていた。ただ、興味深いプログラムが重複していたため、所属大学の先生方と手分けをしてグループワーク関連IPへの参加を余儀なくされたのも事実であった。

さて、このあたりで大会の感想を書かなければならない。しかしながら、意を決して感想を述べる以前の問題をさらしておきたい。最初の誓いどおり正直に告白してしまえば、ここ数年、私は学会の大会期間中、会場に計5時間以上滞在したことはない。自らのポスター発表の在席責任1時間、その前後数十分、休憩室・展示室に40～50分、懇親会会場に2時間弱が典型パターンである。最短記録は、昨年夏、地元神戸で開催された心理学関連学会の大会で、ポスター発表の開始15分前に車で駆けつけ、発表後10分も経たないうちに会場を後にした、というものである。滞在時間よりも問題なのは、他の先生方の研究発表を聴く習慣や態度が形成されていないことである。

何故、このような不埒な者が大会の報告原稿を書いているのか。理由は、この原稿の依頼者である学会会報編集担当の廣岡先生が対人認知エラーを起こしたからである。さらに廣岡先生はもうひとつエラーを重ねている。私の発表は大会2日目の午前で、先述のとおり連名発表を2つかかえていた。ひとつめのポスター発表を終えて休む間もなく次の発表パネルの前に立とうとした時、廣岡先生は不埒者に声をかけた。なんと大会2日目に原稿依頼が行われたのである。通常ならお断りするところだが、発表疲れと依頼者の良き人柄のため、断る気力も行動も顕在化しなかった。だから、インタラクティブは怖い。

少し考え方を換えれば、会場内の交流だけが大会ではないと言える。今回は、栄駅を中心に大会前夜祭、ポスト懇親会などが行われていた。そのひとつに参加し、数多くの先生方と質疑応答を行った。個人的には、出身ゼミの先輩との交流に力が入ってしまった。アルコール水準が高まった頃、「N先輩、お願いだから次テレビに出た時、昔、後輩のゼミ発表で“はぁ～あ”と言って脱力していたのをやってください～い」と周りに聞こえるよう絶叫する私に「おまえさん、そんな大げさに言うことないだろう」と憎めない後輩を懷に包みこむ某先生の姿があった。だから、インタラクティブは楽しい。

近年の自分の大会参加行動からすると奇跡と言えるが、もともと今大会は2日間出席し、延べ10時間以上滞在する予定であった。実際、10時間20分会場に居た。なんとか“大会観戦記”の輪郭ぐらいを書く資格はあるだろうか。ただし、1日目の午前のプログラムと総会は見えていない。

そこで、1日目の午後に参加したIPについて述べたい。大坊先生が企画された“社会的スキル・トレーニング”に関するプログラムであった。自らの発表のひとつが「グループワークによる対人関係能力の向上」の研究であることから、共同研究者の先生方と一緒に参加した。久々に大会中で中身の濃い内容を味わった。そのうえ、内容に刺激され質問をしてみた。その質問に対して、発表者のひとりである津村先生は私の方を向き、十分なアイコンタクトをとりながら丁寧に答えてくれた。誠意をもって応答していただいた大会委員長に素直に敬意を抱くことが出来た。だから、インタラクティブは素晴らしい。

以上、嘘偽りの無い今大会の参加報告でした。

第51回大会に参加して

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程
太幡直也

日本グループ・ダイナミクス学会第51回大会は、5月8日・9日の2日間の日程で、南山大学で開催されました。私が所属する他の学会とは離れた時期にあり、また、大型連休後で気が緩んでいた私にとっては、気を引き締めるのにちょうどよい機会でした。

今回の学会の会場となった建物は非常に新しく、靴を脱いで使用するじゅうたん張りの部屋まであるすばらしい施設に驚きました。また、懇親会では、串焼きやきしめんなど、他では味わえない名古屋名物のおいしい料理を堪能させていただきました。会場の準備にあたられた先生方のご尽力の賜物と感謝を申し上げます。

私が参加させていただいた今回のプログラムの中で特に印象深かったのは、院生セッションとインタラクティブ・プログラムでした。

院生セッションは通常の発表とは異なり、口頭発表する院生が、自分の指定した先生からコメントをいただくという形式の発表でした。聴衆として参加させていただいた私は、

発表された院生の方と指定討論者の先生のやり取りの中で、議論が深まっていく過程を体験させていただきました。先生方のコメントの中には、それぞれの発表について、研究の有用性や現象の適用範囲など、抽象的なレベルから研究を眺めたコメントもあり、自分の研究にも生かせる部分があると思いながらメモをとらせていただきました。院生セッションによって、普段、研究のコメントをいただく機会のない先生からご意見をいただくことが可能になる点が素晴らしいと思います。今後の学会では、機会があれば発表者として院生セッションに積極的に参加してみたいと感じました。

また、インタラクティブ・プログラムは、発表者と参加者の相互作用を念頭に置いたトレーニング形式のものなど、多彩で充実した企画が用意されていました。私はどれに参加しようか迷ったのですが、最終的には、自分の研究領域に近い内容である、「社会関係データとその分析」と、「社会心理学における主観性の科学」に参加させていただきました。「社会関係データとその分析」では、2者以上の関係性を分析の中に積極的に反映させていくための方法論が紹介されていました。一方、「社会心理学における主観性の科学」では、知覚者の主観的経験に着眼した心理現象に関する研究が紹介されていました。共に、今まで社会心理学の中で扱われてこなかった点を積極的に扱っていかうとする新しい取り組みを肌で感じることでできる内容で、発表内容を興味深く聞かせていただきました。最近の社会心理学の流れとして、新しいテーマが扱われるようになり、研究のための手法が考案されているように日頃から感じていましたが、今回のインタラクティブ・プログラムに参加して、まさにそのことを実感いたしました。そして、新しい研究の流れを広範に押さえるために、情報のアンテナをより敏感に張るようにしなければならぬと痛感いたしました。

学会期間中、いろいろな先生方や院生のご発表を聞かせていただき、それぞれの発表内容に非常に刺激を受けた2日間でした。今回の学会で得た経験を自分の研究に生かしていこうと心に誓いながら、帰路につきました。

英語論文ワークショップ

第51回大会にも、大会前日に「理事会企画」として、英語論文ワークショップが開催されました。出席者はさほど多くはなかったようですが、きわめて有意義な時間をすごされたようです。講師をご担当頂いた先生方、改めてお礼の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございました。また、ワークショップに参加された方にご感想をいただいておりますので、ここに紹介させていただきます。

英語論文の書き方ワークショップ（初級）を受講して

名古屋大学教育発達科学研究科
難波久美子

第51回大会に先立って行われた、英語論文の書き方ワークショップの初級コースに参加した。講義は日本語だと聞いているし、以前APAMニュアルに関する講義は、ほんの少しだけだが聴講したことがあるので、黒い電話帳にさほど恐怖心はない。英語で投稿しようという意気込みがあるわけではないが、今夏北京（国際学会）に臨む助走にはなるだろう、という程度の、先生には申し訳ないほどいい加減な動機づけであった。

講義では、Takemoto先生ご自身が、英日翻訳という作業や、査読経験の中でご苦労された点などを踏まえて、英語の発想と日本語の発想の違いやAPAMニュアルの解説があった。表情豊かに繰り出される流暢な日本語は、実に明快なメッセージであった。以下、印象に残ったメッセージと共に、今回の講義の一部をご紹介します。

その1：APAスタイルについて。

「合理性を求めてはいけない」

そこには何かの法則性や、日本人には分からない文法が潜んでいるはずだ[だから分からないのだ]、という期待[言い訳]が打ち砕かれた。ほっとしたと言ってもいい。だからといってそのまま覚え込めということではなく、説明のつくことに関しては、丁寧に解説をして下さった。非常に納得する点もあり、相変わらず分からないこともあり。そういうものらしい。

その2：書き方について。

「文献は、APAスタイルで書かれているものを、Webページで探せばよい」

初心者には、電話帳のようなマニュアルを片手に、文献を自分で入力するよりは、すでに出来上がっているものを有効利用することを考えても良いのではないかな。そして、本文についても同様、“スタイル”なので、まずは出来上がっているものを真似ることから始めれば早い。もちろん、内容はその限りでない。

その3：英語で書くということについて。

「とにかく、主語・しゅご・シュゴ！ と唱えながら書きなさい」「我々イギリス人は、受動態が“お洒落”と思っているが、難しく書くことはない。接続詞・主語・動詞・名詞！ これだけ繰り返せばよい」

よく聞く話である。しかし、この点については、翌日、実感することになる。それは、Takemoto先生を偶然ポスター発表の会場でお見かけし、お話する機会を得たときのことである。日本語で拙い研究の紹介をしていたのだが、Takemoto先生からの質問に答えるたび、自身の話し方について、『シュゴ』が正しい加減なままであること、冗長な説明で、中心が分かりにくいことを実感させられた。英語論文を書こうとするときだけでなく、常々の思考の中に主語を置き、簡潔に構成する必要を改めて覚えた次第である。

以上、聴講中には、なるほど、なるほど、と何かしら納得している気分になっていた。しかし残念なことに、実際に困ってみないとなかなか使えるような状態で頭には残らない、ということも、また学びの1つである。次の機会には、あれこれ困った後で、英語論文を片手に（できれば中級に）臨みたいものである。いい加減な動機づけが少々前向きな物に変わったように思う。貴重な機会を提供していただいた大会準備委員会の先生方、そして誰より、Takemoto先生に感謝申し上げたい。ありがとうございました。

「英語論文の書き方ワークショップ」に参加して

名古屋大学教育発達科学研究科
野田 理世

5月のゴールデンウィーク最後の週末に、名古屋の南山大学で日本グループ・ダイナミックス学会第51回大会が開催された。幸運にも、私は、大会が主催する英語論文の書き方ワークショップに参加することができた。

ワークショップは、初級・中級コースからなっており、私は中級コースを受講させて頂いた。ワークショップは小人数制で、受講者と講師のコミュニケーションがなされるように非常に配慮されたものであった。中級コースの前半は、講義の最初に、講師のCroker先生が受講者の希望を確認した上で、論文の構成の仕方について説明して下さった。特に、(1)文章のスタイルの問題、(2)論文の中に書かれる内容の構成、を中心に話は進められた。まず、論文を書いた際に自分が注意した点を提示して、その上で、足りない点をCroker先生が補うという形でワークショップは進められた。ここでは、コミュニケーションを通して、参加することを非常に重視したワークショップを経験することができたように思う。

およそ90分にわたる前半のワークショップを終えた後、数十分の休憩をはさみ、ワークショップの後半に入った。後半では、受講者が持参した論文の数ページを読んで、批判することから始まった。批判といっても、「なぜこう書いたの？」という質問型のものではなく、「こう書くのは、～の理由でまずい」という明確な根拠を英語で示す型であったため、非常に頭を使った。その後で、Croker先生が、実際に、我々の論文の中で、削除すべき文章と補うべき文章を明確な根拠を提示して説明して下さった。受講生の多くは、「エッセイの書き方」なる講義で学んだ文章の書き方について、無視した方がよい「原則」とそうでないものがあるが、その判断がしきれずに論文を書き上げたようであった。その点に関しても、Croker先生は、心理学の論文を執筆する際にも守るべき「原則」とそうでないものを、根拠を示し説明して下さった。我々は、自分の書き上げた論文を基に指導を受けたことを通して、心理学の論文を執筆する際に、守るべき「原則」というものを十分に理解できたように思う。

最後になるが、この度、ご多忙にも関わらず、このように貴重な経験のできるワークショップを企画して下さいました先生方、また、有意義な講義をして下さったCroker先生に心より感謝したい。今後は、この経験を実践に活かし、論文を英語で書くことに臆することなくチャレンジしたい。

Impact Factor of AJSP in 2003

Asian Journal of Social Psychology

Impact Factor Number of citations appearing in the literature in 2003, which

$$\frac{\text{Cites to recent articles}}{\text{Number of recent articles}} = \frac{17}{28} = 0.607$$

Immediacy Index

$$\frac{\text{Cites to current articles (in 2003)}}{\text{Number of current articles (in 2003)}} = \frac{6}{18} = 0.333$$

Subject category: PSYCHOLOGY, SOCIAL

Journal rank/ Total journals
2003 29/46

Citing journals: Number of times articles published in 2003 cited articles published in *Asian Journal of Social Psychology*

Citing Journal	All years	Impact factor
All Journals	90	
ALL OTHERS (19)	19	
J CROSS CULT PSYCHOL	16	1.470
ASIAN J SOC PSYCHOL	13	0.607
HUM COMMUN RES	7	1.612
COUNS PSYCHOL	3	1.394
J SOC PSYCHOL	3	0.291
PSYCHOL ASSESSMENT	3	2.370
ANNU REV PSYCHOL	2	9.896
BRIT J SOC PSYCHOL	2	2.109
CULT PSYCHOL	2	0.881
J IMMUNOL	2	
J ORGAN BEHAV	2	1.431

アジア社会心理学会第6回大会（ウエリントン）

アジア社会心理学会第6回大会は、2005年4月2日～5日、ニュージーランドのウエリントンにて開催予定です。この度、大会委員長のDr. James Liu氏（Victoria University of Wellington）からグルダイの会員へお誘いのメッセージをいただきました。以下にその全文をご紹介します。

Dear Colleagues,

It is my great pleasure to announce that registration and abstract submission for the Asian Association of Social Psychology (AASP)'s 2005 conference in Wellington, New Zealand is now available on line at the following address:

<http://www.vuw.ac.nz/cacr/aasp/>

We take special delight in inviting our colleagues and members from the

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

Japanese Group Dynamics Association (JGDA) to celebrate the 10th anniversary of AASP. The conference plenary theme is "Global perspectives on Asian social psychology", and Professor Tomohide Atsumi of JGDA is one of the invited speakers who will present a plenary address on this topic. We would like to take this opportunity to look back at our history, especially the wonderful collaboration between AASP and JGDA that has led to, among other things, the establishment of AJSP as a leading journal in the area. We also look forward to future endeavours to improve the discipline of social psychology in our respective home countries and internationally. It is our great honour to look forward to hosting your visits to our beautiful country in the south pacific next year! Please do not hesitate to contact me or other members of the organizing team if you have any questions.

Best wishes
Dr. James Liu
AASP 2005 Organizing Committee

Dr. James H. Liu
Deputy Director, Centre for Applied Cross Cultural Research
School of Psychology
PO Box 600
Victoria University of Wellington
Wellington, New Zealand
FAX 64-4-463-5402
Phone 64-4-463-5153

以下は、アジア社会心理学会第6回大会Webサイトからの転載です。詳細は当サイトにてご確認ください。

Call for Abstracts (papers and posters)
Deadline : 3 December 2004

Submissions :

The Conference Committee invites academics, researchers, students and practitioners to submit abstracts on all aspects of research, teaching and policy relating to Asian social psychology. Abstracts are not restricted to the conference theme. The Conference Committee reserves the right to schedule individual abstracts as papers or posters, but will try to satisfy all requests.

Paper Presentations:

Papers are presented orally in thematically grouped sessions. These sessions vary in length (either 90 minutes or two hours long), and provide opportunities for three or more presentations in each session. Each paper will be allocated somewhere between 20 to 30 minutes presentation time.

There are two submission options:

Individual paper:

A paper is submitted independently and will be thematically grouped by the Conference Committee to form a conference session.

Paper Symposium :

A collection of 3 or more thematically related papers submitted by a group for presentation in a conference session.

Poster Presentations:

Posters presenting original work will be scheduled in a special time slot during which there will be no concurrent sessions.

There are two submission options:

Individual poster:

A poster is submitted independently and will be thematically grouped for

presentation.

Symposium:

A collection of three or more thematically related posters submitted by a group for presentation.

Registration:Registration is now available.

<https://www.saviosolutions.com/vuw/aasp/aasp.html>

2003年度第5回 常任理事会・常任編集委員会議事録

日時：2004年5月7日 13:00-16:00

場所：南山大学D42

出席者：渥美・大橋・大淵・廣岡・山口・吉田

常任理事会

【報告事項】

総務

1. 優秀論文賞の選考経過

大坊選考委員長からの連絡を受けた渥美会長より、常任理事会と並行して順調に選考中であるとの報告があった。

2. 日本心理学諸学会連合について

大淵常任理事より、諸学会連合と日本心理学会がそれぞれ独自に代表を選出したとの報告があり、渥美会長より、当学会としては、連合の動きを当分の間、静観することとした。

3. 名誉会員推戴

渥美会長より、本年度は、鈴木康平先生を推戴申し上げるとの報告があり、了承された。

4. 科研費（渥美）

渥美会長より、AJSPの出版に対して120万円の科研費交付が内定したことが報告された。

広報

1. ぐるだいニュースの発行

廣岡常任理事より、6月～7月に第27号を発行するとの報告があった。

2. ホームページの運用

廣岡常任理事より、独自のドメイン（groupdynamics.gr.jp）を獲得したことが報告された。

会計・事務（渥美）

1. 会員異動

渥美会長より、2004年1月末現在の会員数が887名であること、内訳と増減は下記の通りであることが報告された：

国内	878名	+ 海外	9名	(+ 26名)
一般	737名			(+ 8名)
学生	131名			(+ 19名)
賛助	3件(5口)			(- 1件)
名誉	16名			(± 0名)

その他

1. 監査報告

渥美会長より、2002年度の監査が終了したこと、および、2003年度の監査は大会後に実施することが報告された。

■ワーキンググループから

大会関係

廣岡常任理事より、大会の準備において南山大学の皆さんの並々ならぬご尽力があったことが報告された。

雑誌改革

渥美会長より、雑誌改革を含む特別企画を提案するに至った経緯が報告された。具体的には、前大会時の会長提案、ニュースレターへの記載、常任理事会での検討、メーリングリストを通じて理事からの意見聴取、常任理事会での再検討などを経て、今大会時の常任理事会・理事会・総会において議題として提出して決定に至ることを早急と認識し、さらに会員から広く意見を聴取する方が良いとの判断に至ったことが報告され、意見聴取の場として、今大会がグループワークの盛んな南山大学での開催であることを踏まえて、グループワーク形式で広く意見を募る試みを提案したことが確認された。大会終了後に、意見を集約し、常任理事会で検討し、さらに理事会の議決を経たならば次期総会にて検討する見通しが示された。すべての経緯において、会長はもとより、常任理事会、ないし、理事会の独断専行とならないように十分に会員の意見を採り入れることが確認された。

OLJ・編集システム

渥美会長より、オンラインジャーナルが刊行され、概ね好評であることが報告された。

事務移行

渥美会長より、矢守常任理事とともに中西印刷、および、学会事務センターと折衝しながら、順調に事務移行を完了しつつあることが報告された。ただし、移行期の入退会の処理や大会事務局に最新の名簿を提供できないなど遅れが出ている面があり、大会時点では、個別に対応することとした。

会員資格

大橋常任理事より、海外在住会員、社会人大学院生など多様な会員構成に配慮し、実践会員や準会員など新規資格も含めて会員資格の検討を実施することが報告された。

倫理規定

吉田常任理事、山口常任理事より、罰則規定を設けることの是非、二重投稿規定など、倫理規定に関する原案を作成していくための委員会設置を検討していることが報告された。

選挙・選挙改革

大淵常任理事より資料の通り、選挙規定における検討事項が提示され、本質的対処を示した上で、現状に合わせて当面の対処を申し合わせる必要が報告され、理事会にて検討することとした。

【審議事項】

1. 2002年度決算案

資料2の通り、監査を経た決算案が提示され、了承された。

2. 2003年度決算案に関する暫定的決定について

2003年度決算については、まだ準備できていないので、準備でき次第、監査を受けることが了承された。

3. 2004年度予算案

2004年度予算案が提示され、議論の結果、了承された。科研費の獲得、為替差益、会費納入率の向上、などある程度安定した収入増が認められるので、会費の値下げなどが考えられるが、まだ十分ではないため、来年度以降の課題とし、むしろ賞の創設など若手会員に魅力的な事項に充当する方向で検討していくことを合意した。なお、予算年度と大会開催時期との関係から3年分の決算(案)・予算(案)を検討する事態となっていることへの憂慮が示され、書式も含めて、事務支局(中西印刷)と相談しながら、より説明責任を果たせる形式への移行を検討していくことを合意した。

4. 会則・細則変更について確認

資料1の通り、事務移行に伴う会則・細則の変更案が示され、了承した。

5. AASP大会参加奨励賞創設

渥美会長からAASP大会参加奨励賞の創設が選考規定案を伴って提案された。前監査の事業監査報告を反映した提案であり、創設していくことで合意したが、細部については、さらに検討していくこととした。

6. バックナンバーのオンライン化推進費創設

会費に余裕を認める場合に、学会誌のバックナンバーをオンライン化していくことが了承され、今年度は、5年分相当の金額を予算に含めることが確認された。

7. 第52回大会開催について

渥美会長より、第52回大会は、2005年3月20日、21日に神戸で開催するとの提案がなされ、了承された。

その他

理事会議案、総会議案の確認をおこなった。

常任編集委員会

【報告事項】

第43巻1号、2号（原著9本、資料3本）を発刊したことが報告された。2003年度は、投稿19本（掲載済み4本、審査中13本、掲載不可2本）であり、現在合計23本審査中であるとの報告があった。

AJSP は、Vol6 No.1-3が順調に発行されたことが報告された。

【審議事項】

投稿・審査状況について

資料（非開示）をもとに、投稿・審査状況を検討した。著者改稿が長期間にわたる傾向が認められるため、さらに督促を行い会員に協力をもとめることを了承した。ただ、数年にわたる督促に応じない論文に関しては、一旦審査をうち切り、再投稿を促すこととした。具体的には、2001年までに投稿された論文で未だ著者改稿中となっている論文が対象となる。

2003年度第5回 理事会・編集委員会議事録

日時：2004年5月7日 16:00-

場所：南山大学D42

出席者：

相川充 安藤清志 渥美公秀 大坊郁夫 遠藤由美 飛田操 廣岡秀一 唐沢穰
國吉和子 南博文 大橋英寿 大淵憲一 坂田桐子 鹿内啓子 高井 次郎
浦光博 渡邊としえ 山口裕幸 吉田道雄

（敬称略・アルファベット順）

理事会

【報告事項】

総務

1. 優秀論文賞の選考経過

大坊選考委員長より、選考委員会での審議の結果、42巻1号掲載の「高口央・坂田桐子・黒川正流 集団間状況における複数リーダー存在の効果に関する検討」が受賞対象として理事会に推薦することが、選考経緯とともに報告され、了承された。なお、規定枚数を超えた論文の問題、質的研究の取り扱い、「資料」論文の取り扱いなどについて、委員会の席上議論されたことが報告された

2. 日本心理学諸学会連合について

大淵常任理事より、諸学会連合と日本心理学会がそれぞれ独自に代表を選出したとの報告があり、渥美会長より、当学会としては、連合の動きを当分の間、静観することとした。

3. 名誉会員推戴

渥美会長より、本年度は、鈴木康平先生を推戴申し上げるとの報告があり、了承さ

れた。

4. 科研費（渥美）

渥美会長より、AJSPの出版に対して120万円の科研費交付が内定したことが報告された。

広報

1. ぐるだいニュースの発行

廣岡常任理事より、6月～7月に第27号を発行するとの報告があった。

2. ホームページの運用

廣岡常任理事より、独自のドメイン（groupdynamics.gr.jp）を獲得したことが報告された。

会計・事務（渥美）

1. 会員異動

渥美会長より、2004年1月末現在の会員数が887名であること、内訳と増減は下記の通りであることが報告された：

国内	878名	+	海外	9名	(+26名)
一般	737名	(+8名)			
学生	131名	(+19名)			
賛助	3件(5口)	(-1件)			
名誉	16名	(±0名)			

その他

1. 監査報告

渥美会長より、2002年度の監査が終了したこと、および、2003年度の監査は大会後に実施することが報告された。

■ワーキンググループから

大会関係

廣岡常任理事より、大会の準備において南山大学の皆さんの並々ならぬご尽力があったことが報告された。

雑誌改革

渥美会長より、雑誌改革を含む特別企画を提案するに至った経緯が報告された。具体的には、前大会時の会長提案、ニュースレターへの記載、常任理事会での検討、メーリングリストを通じて理事からの意見聴取、常任理事会での再検討などを経て、今大会時の常任理事会・理事会・総会において議題として提出して決定に至ることを早急と認識し、さらに会員から広く意見を聴取する方が良いとの判断に至ったことが報告され、意見聴取の場として、今大会がグループワークの盛んな南山大学での開催であることを踏まえて、グループワーク形式で広く意見を募る試みを提案したことが確認された。大会終了後に、意見を集約し、常任理事会で検討し、さらに理事会の議決を経たならば次期総会にて検討する見通しが示された。すべての経緯において、会長はもとより、常任理事会、ないし、理事会の独断専行とならないように十分に会員の意見を採り入れることが確認された。

OLJ・編集システム

渥美会長より、オンラインジャーナルが刊行され概ね好評であることが報告された。

事務移行

渥美会長より、矢守常任理事とともに中西印刷、および、学会事務センターと折衝しながら、順調に事務移行を完了しつつあることが報告された。ただし、移行期の入退会の処理や大会事務局に最新の名簿を提供できないなど遅れが出ている面があり、大会時点では、個別に対応することとした。

会員資格

大橋常任理事より、海外在住会員、社会人大学院生など多様な会員構成に配慮し、実践会員や準会員など新規資格も含めて会員資格の検討を実施することが報告された。

倫理規定

吉田常任理事、山口常任理事より、罰則規定を設けることの是非、二重投稿規定など、倫理規定に関する原案を作成していくための委員会設置を検討していることが報告された。

選挙・選挙改革

大淵常任理事より資料の通り、選挙規定における検討事項が提示され、本質的対応を示した上で、現状に合わせて当面の対応を申し合わせる必要が報告され、理事会にて検討し、申し合わせ事項として了承した。

【審議事項】

1. 2002年度決算案

資料2の通り、監査を経た決算案が提示され、了承された。

2. 2003年度決算案に関する暫定的決定について

2003年度決算については、まだ準備できていないので、準備でき次第、監査を受けることが了承された。

3. 2004年度予算案

2004年度予算案が提示され、議論の結果、了承された。科研費の獲得、為替差益、会費納入率の向上、などある程度安定した収入増が認められるので、会費の値下げなどが考えられるが、まだ十分ではないため、来年度以降の課題とし、むしろ賞の創設など若手会員に魅力的な事項に充当する方向で検討していくことを合意した。なお、予算年度と大会開催時期との関係から3年分の決算(案)・予算(案)を検討する事態となっていることへの憂慮が示され、書式も含め、さらには、会計士との相談などについても、事務支局(中西印刷)と相談しながら、より説明責任を果たせる形式への移行を検討していくことを合意した。

4. 会則・細則変更

資料1の通り、事務移行に伴う会則・細則の変更案が審議され、了承した。

5. AASP大会参加奨励賞創設

渥美会長からAASP大会参加奨励賞の創設が選考規定案を伴って提案された。前監査の事業監査報告を反映した提案であり、創設していくことで合意したが、細部については、さらに検討していくこととした。

6. バックナンバーのオンライン化推進費創設

会費に余裕を認める場合に、学会誌のバックナンバーをオンライン化していくことが了承され、今年度は、5年分相当の金額を予算に含めることが確認された。

7. 第52回大会開催について

渥美会長より、第52回大会は、2005年3月20日、21日に神戸で開催するとの提案がなされ、了承された。

その他

総会議案の確認をおこなった。

編集委員会

【報告事項】

第43巻1号、2号(原著9本、資料3本)を発刊したことが報告された。2003年度は、投稿19本(掲載済み4本、審査中13本、掲載不可2本)であり、現在合計23本審査中であるとの報告があった。

AJSPは、Vol6 No.1-3が順調に発行されたことが報告された。

【審議事項】

投稿・審査状況について

資料(非開示)をもとに、投稿・審査状況を検討した。著者改稿が長期間にわたる傾向が認められるため、さらに督促を行い会員に協力をもとめることを了承した。ただ、数年にわたる督促に応じない論文に関しては、一旦審査をうち切り、再投稿を促すこととした。具体的には、延長願いも含めて最終的な改稿締め切りから半年を経過した論文について、一旦審査をうち切り、再投稿を促すこととした。

その他

優秀論文賞の審査経緯から指摘された諸問題(展望論文も対象とするか否か、投票時にコメントをつけるかどうか、ページ数を大幅に超過している論文の取り扱い)について、意見が交わされ、常任編集委員会で継続審議することとした。

第51回大会 総会議事録

第51回大会大会委員長（津村俊充先生）挨拶

【報告事項】

総務

1. 細則変更
事務移行に伴う細則の変更を報告した。
2. 科研費
渥美会長より、AJSPの出版に対して120万円の科研費交付が内定したことが報告された。
3. 日本心理学諸学会連合について
大淵常任理事より、諸学会連合と日本心理学会がそれぞれ独自に代表を選出したとの報告があり、渥美会長より、当学会としては、連合の動きを当分の間、静観することとした。

広報

1. ぐるだいニュースの発行
廣岡常任理事より、6月～7月に第27号を発行するとの報告があった。
2. ホームページの運用
廣岡常任理事より、独自のドメイン（groupdynamics.gr.jp）を獲得したことが報告された。

編集

1. 実験社会心理学研究の投稿・審査状況について
第43巻1号、2号（原著9本、資料3本）を発刊したことが報告された。2003年度は、投稿19本（掲載済み4本、審査中13本、掲載不可2本）であり、現在合計23本審査中であるとの報告があった。
AJSPは、Vol6 No.1-3が順調に発行されたことが報告された。
なお、著者改稿が長期間にわたる傾向が認められるため、さらに督促を行い会員に協力をもとめた。さらに、数年にわたる督促に応じない論文に関しては、一旦審査をうち切り、再投稿を促すこととした旨、報告した。具体的には、改稿延期を含めて最終改稿期限から半年を経過した論文を対象とすることを報告した。

会計・事務

1. 会員異動
渥美会長より、2004年1月末現在の会員数が887名であること、内訳と増減は下記の通りであることが報告された：
国内 878名 + 海外 9名 (+ 26名)
一般 737名 (+ 8名)
学生 131名 (+ 19名)
賛助 3件(5口) (- 1件)
名誉 16名 (+ 0名)

■ワーキンググループから

大会関係

廣岡常任理事より、大会の準備において南山大学の皆さんの並々ならぬご尽力があったことが報告された。

雑誌改革

渥美会長より、雑誌改革を含む特別企画を提案するに至った経緯の概要が報告された。会場よりさらに詳細に説明するようにとの声があったので、前大会時の会長提案の概要を確認し、その後の経緯を説明した。具体的には、ニュースレターへの記載、常任理事会での検討、メーリングリストを通じて理事からの意見聴取、常任理事会での再検討などを経て、今大会では、さらに会員から広く意見を募る試みとして、特別企画を提案していることが述べられた。大会終了後に、意見を集約し、常任理事会で

検討し、さらに理事会の議決を経たならば次期総会にて検討する見通しが示された。すべての経緯において、会長はもとより、常任理事会、ないし、理事会の独断専行とならないように十分に会員の意見を採り入れることが確認された。

OLJ・編集システム

渥美会長より、オンラインジャーナルが刊行され概ね好評であることが報告された。

事務移行

渥美会長より、矢守常任理事とともに中西印刷、および、学会事務センターと折衝しながら、順調に事務移行を完了しつつあることが報告された。

会員資格

大橋常任理事より、海外在住会員、社会人大学院生など多様な会員構成に配慮し、実践会員や準会員など新規資格も含めて会員資格の検討を実施することが報告された。

倫理規定

吉田常任理事、山口常任理事より、罰則規定を設けることの是非、二重投稿規定など、倫理規定に関する原案を作成していくための委員会設置を検討していることが報告された。

選挙・選挙改革

大淵常任理事より、理事会において、資料の通り、選挙規定における検討事項が提示され、本質的対処を示した上で、当面の対処を申し合わせたことが報告された。

【審議事項】

1．会則変更

資料1の通り、事務移行に伴う会則を審議の上、承認した。

2．2002年度決算

資料2の通り、監査を経た決算案が提示され、了承された。

3．2003年度決算案に関する暫定的決定について

2003年度決算については、まだ準備できていないので、準備でき次第、監査を受けることが了承された。

4．監査報告

杉万監査から、2002年度の会計監査を実施したところ、問題なく処理されていたこと、および、2003年度の監査については、決算ができ次第実施することが報告された。また、事業監査としては、オンラインジャーナルの刊行やAJSPに対する科研費の獲得などの実績を上げていること、また、様々な改革に積極的に取り組んでいることを評価するとの報告があった。

5．2004年度予算案

2004年度予算案が提示され、議論の結果、了承された。科研費の獲得、為替差益、会費納入率の向上、などある程度安定した収入増が認められるので、会費の値下げなどが考えられるが、まだ十分ではないため、来年度以降の課題とし、むしろ賞の創設など若手会員に魅力的な事項に充当する方向で検討していくことを承認した。なお、予算年度と大会開催時期との関係から3年分の決算(案)・予算(案)を検討する事態となっていることへの憂慮が示され、書式も含めて、事務支局(中西印刷)と相談しながら、より説明責任を果たせる形式への移行を検討していくことを承認した。

6．第52回大会開催について

渥美会長より、第52回大会は、2005年3月20日、21日に神戸で開催するとの提案がなされ、了承された。

大会報告

第50回大会(於:キャンパスプラザ京都)決算報告

堀毛大会委員長より、資料3の通り、決算報告があった。

優秀論文賞報告(大坊郁夫選考委員長)

大坊選考委員長より、選考委員会での審議の結果、42巻1号掲載の「高口央・坂田桐子・黒川正流 集団間状況における複数リーダー存在の効果に関する検討」に優秀論文賞を授与することに決定したことが報告された。

名誉会員推戴式

鈴木康平先生を名誉会員として推戴し、賞状を授与した。

資料1 会則第2条改正

改正前：この会の事務所は当分の間、大阪大学人間科学部 渥美公秀研究室（〒565-0871大阪府吹田市山田丘1-2）におく。

改正後：この会の本部事務局・編集事務局は当分の間、大阪大学人間科学部 渥美公秀研究室（〒565-0871大阪府吹田市山田丘1-2）におく。この会の事務支局は当分の間、中西印刷（〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル）におく

【重要】総会決議のお知らせ

会 長

渥美 公秀

51回記念大会の運営にご参画いただきました理事を始め会員の皆様に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。さて、南山大学大会時に開催されました総会への出席者数は、残念ながら全正会員数の過半数には達しませんでした。したがって、規定により「仮総会」となっています。仮総会での決議は効力を発するのは、学会会則細則第11条に、「仮総会の場合には、その決議事項を全会員に通報し、その後1月以内に会員総数の過半数が文書によってこれに反対しないときは総会の決議としての効力を発するものとする。」と規定されています。遅くなりましたが、このぐらだいニュース第27号の発行をもって全会員への通報に代えさせていただきます。

「実験社会心理学研究」最新編集状況

常任編集委員長

「実験社会心理学研究」最新編集状況（2004年8月9日現在）報告

投稿論文総数： 31編
44巻1号掲載決定論文： 1編
主査掲載可論文： 2編
審査進行中論文： 23編
審査者審査中： 13編
著者改稿中： 10編
（審査員選出中： 0編）
取り下げ論文： 3編
掲載不可論文： 2編

皆様からのご投稿をお待ち申し上げております。なお、44巻1号に掲載予定の論文の受理までの約1年を要しています。2004年に入って投稿された論文の初回審査には、3ヶ月～6ヶ月を要しております。改稿も延期される方が増えております。迅速な審査を行って頂けますように全力を尽くしますが、改稿中の著者の皆様には是非とも早急に提出頂けますようお願い申し上げます。

広報担当からのお知らせ

JGDA Flash：グルダイでは【日本グループダイナミクス学会・広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約600名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかとと思いますが、登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、グルダイ広報メールマガジン運営担当マスターのアドレス

jgda_flash@epsycho.edu.mie-u.ac.jp

までお願いいたします。また、新刊案内や研究会案内等のニュース記事も大歓迎いたします。同アドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs.cgi>

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

で閲覧可能です。

事務局からのお願い

実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1-2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。詳細は事務局までお問い合わせください。

実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

グルダイ学会関係連絡先

2004年4月1日から、入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先が変更されました。以下の事務支局（中西印刷）にお願いします。

【事務支局】住所・所属変更、その他お問い合わせは、

中西印刷株式会社 学会部（日本グループ・ダイナミックス学会担当：岡田）

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル

TEL: 075-415-3661 FAX: 075-415-3662 e-mail: jgda@nacos.com

投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見は、
大阪大学大学院人間科学研究科 渥美公秀研究室

〒565-0871 吹田市山田丘1-2 大阪大学大学院人間科学研究科

TEL・Fax: 06-6879-8066 E-mail: atsumi@hus.osaka-u.ac.jp

ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報などは、

三重大学教育学部 廣岡秀一研究室

〒514-8507 三重県津市上浜町1-5-15 三重大学教育学部

TEL・Fax: 059-231-9329

もしくは、E-mail: jgda_flash@psycho.edu.mie-u.ac.jp までお送りください。

また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

学会事務局

大阪大学大学院人間科学研究科 渥美公秀研究室

〒565-0871 吹田市山田丘1-2 大阪大学大学院人間科学研究科

TEL・Fax: 06-6879-8066 E-mail: atsumi@hus.osaka-u.ac.jp

（編集後記）■南山大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第51回大会は、「インタラクティブ」をテーマとして開催され、盛会の内に全日程を終えられました。津村大会準備委員長をはじめ準備委員の皆様、本当にありがとうございました。■ニュース編集もいろいろ大変です。しかし助かるのは、原稿依頼を快く引き受けてくださる会員ばかりだということです。森上さん、編者の度重なるエラーにも関わらずご快諾くださり、本当にありがとうございました。他、大会時の急な執筆依頼に真摯にお応え頂いた執筆者の皆様、本当にありがとうございました。先生方の玉稿を早々にいただきながらも、諸般の事情で発行にいたるまで長い時間をかけてしまいました。あらためてお詫び申し上げます。■4月から中西印刷による会務事務作業がすでに始まっています。連絡先の変更にお気をつけください。また近いうちに、会員名簿も発行されるはず。■今秋には会長・理事の選挙も控えています。■会員異動のお知らせについては、紙面の都合上、今号では割愛させて頂きました。申し訳ありません。謝ってばかりです、拝（廣）。

2002年度決算・2003年度予算・2004年度予算案

【収入】

2002年度決算

2003年予算

2004年度予算案

	単価	人数	金額	金額	金額
会 費			¥9,396,375	¥9,380,000	¥9,380,000
一般会費	12,000	630	¥7,325,400	¥7,560,000	¥7,560,000
学生会費	6,000	80	¥727,600	¥480,000	¥480,000
賛助会費	20,000	5	¥100,000	¥100,000	¥100,000
入会金	1,000	40	¥49,000	¥40,000	¥40,000
雑誌定期購読			¥1,194,375	¥1,200,000	¥1,200,000
雑誌超過頁個人負担分	¥		¥640,000	¥300,000	¥300,000
分冊売上			¥318,580	¥50,000	¥50,000
広告収入			¥177,500	¥150,000	¥150,000
雑収入（利息など）			¥575,734	¥10,000	¥10,000
名簿作成積立金繰り入れ			¥700,000	¥0	¥700,000
前期より繰り入れ			¥3,295,207	¥1,900,000	¥4,165,700
科学研究費補助金			¥900,000	¥850,000	¥1,200,000
共催講座			¥0	¥300,000	¥300,000
合計			¥16,003,396	¥12,940,000	¥16,255,700

【支出】

2002年度決算

2003年予算

2004年度予算案

	単価	回数	人数	金額	金額	金額
実験社会心理学研究				¥2,215,610	¥2,398,400	¥2,398,400
印刷費				¥1,906,800	¥2,000,000	¥2,000,000
送料	60	2	820	¥103,430	¥98,400	¥98,400
編集事務費				¥205,380	¥300,000	¥300,000
A J S P				¥2,982,015	¥3,843,500	¥3,843,500
購入費（34ドル×130円／ドル）	4,420	1	820	¥2,853,600	¥3,624,400	¥3,624,400
送料	85	3	820	¥123,060	¥209,100	¥209,100
編集事務費				¥5,355	¥10,000	¥10,000
ニュースレター				¥269,550	¥462,400	¥462,400
印刷費	50,000	4		¥124,110	¥200,000	¥200,000
送料	80	4	820	¥145,440	¥262,400	¥262,400
優秀論文賞				¥100,000	¥110,000	¥110,000
賞金				¥100,000	¥100,000	¥100,000
事務・雑費				¥0	¥10,000	¥10,000
名誉会員推戴関係費				¥0	¥20,000	¥20,000
地域別合評会補助金				¥0	¥30,000	¥30,000
大会助成金				¥300,000	¥300,000	¥400,000
ホームページ管理費				¥60,000	¥60,000	¥60,000
事務費				¥2,173,217	¥2,160,000	¥2,080,000
事務委託費				¥1,570,495	¥1,400,000	¥1,480,000
通信・交通費（学会事務センター）				¥142,332	¥140,000	¥0
事務雑費（学会事務センター）				¥6,990	¥20,000	¥0
人件費（事務局）				¥453,400	¥600,000	¥600,000
理事会費				¥483,760	¥550,000	¥550,000
心理学諸学会連合会費				¥60,000	¥30,000	¥30,000
名簿作成・理事選挙費				¥1,058,604	¥700,000	¥1,200,000
研究委員会／新企画初動経費／賞				¥0	¥300,000	¥560,000
バックナンバーのオンライン化推進費				¥0		¥600,000
雑費				¥36,868	¥60,000	¥60,000
予備費				¥154,725	¥1,915,700	¥2,091,400
AJSP為替変動対策					¥557,600	¥278,800
事務移行経費					¥500,000	¥400,000
科学研究費補助金関連					¥850,000	¥1,000,000
その他					¥8,100	¥412,600
次期繰り越し				¥6,109,047	¥0	¥1,760,000
合計				¥16,003,396	¥12,940,000	¥16,255,700

資料 2

資料 2

日本グループ・ダイナミクス学会第50回大会決算報告書

資料3

収入			
費目	単価	人数	金額
参加費		300名	¥1,558,000
正会員予約参加	¥5,000	206	¥1,030,000
正会員当日参加	¥6,000	46	¥276,000
非会員予約参加	¥6,000	22	¥132,000
学生当日会員	¥2,000	9	¥18,000
非会員連名発表費		17	¥102,000
論文集			¥1,423,500
予約・掲載料	¥5,000	222	¥1,110,000
写真掲載料	¥1,000	0	¥0
当日購入	¥5,500	36	¥198,000
学会事務センター購入	¥3,000	35	¥115,500
プログラム当日購入	¥500	0	¥0
懇親会		173名	¥695,500
一般予約参加	¥4,500	63	¥283,500
院生予約参加	¥3,000	42	¥126,000
一般当日参加	¥5,000	41	¥205,000
院生当日参加	¥3,000	27	¥81,000
弁当	¥500		
補助・協賛			¥497,837
大会助成金			¥300,000
学会一般会計より補助			¥127,837
広告・協賛			¥70,000
収入合計			¥4,174,837

支出	
費目	金額
印刷等	¥1,184,400
プログラム・論文集	¥1,088,850
通信費	¥95,550
郵送料	¥277,733
休憩室	¥36,038
弁当代	¥300,000
懇親会費	¥520,000
パネリスト記念品	¥144,500
アルバイト代	¥578,000
大会委員会会合費	¥8,800
事務雑費	¥193,135
会場費	¥932,231
賃貸・駐車料	¥242,960
設営	¥408,450
機材	¥128,121
スタッフ	¥109,200
人件費	¥43,500
支出合計	¥4,174,837

2004年5月8日

第50回大会委員長

堀 毛 一 也

< S P S S 社広告挿入 >